

幸福論ノート

愛と性と死と

江口榛一 著

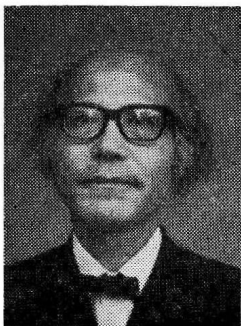
愛と性と死と

幸福論ノート

江口榛一著

読売新聞社





〈著者略歴〉

1914年(大正3年)3月 大分県生まれ。
1937年3月 明大文芸科卒、その後新聞
記者、映画会社脚本部員、移動演劇
連盟職員、出版社編集長、学校教師
などを経て現在の著作生活に入る。
おもな著書：歌集「故山の雪」、ロー
マ字童謡集「シッポノユクエ」、詩集
「荒野への招待」、自伝「背徳者」、
ルボルタージュ「地の塩の箱」

こうふくろん
幸福論ノート

定価 550 円

昭和45年9月10日 第1刷

著 者 え ぐち しん いち
江 口 榛 一

発 行人 に 宮 信 親

発 行 所 読 売 新 聞 社

東京都中央区銀座3の2の1 〒104

大阪市北区野崎町77 〒530

北九州市小倉区明和町1の11 〒802

印 刷 所 凸版印刷株式会社

製 本 所 協和製本株式会社

©, SHINICHI EGUCHI, 1970

目

次

序詩 物語

自殺について

永遠の生命

愛・性・死

自己に対する義務

完徳への希望

あとがき

装丁・重原
保男

序詩 物語

途中に奥津城おくつぎがいくつもあった。

蘚苔類せんたいるいに覆われた沢のはずれに、
あるいはブナの疎林そりんのなかに。

若い日日、それらの

碑銘ひめいを読みながらわたしはのぼった。

無数の段丘だんきゅうがあった。

這松はまつの美しい樹氷じゅひやうも見た。

脚下あしもとはるかに 万年雪まんねんせつの峯みねがまぶしかった。

ああ然し

旅路はそこでも終らない。

いたく年老いて

漸くわたしはたどりついた。そして

ある日ふとそこに立っていた。

幼いころ寝物語に母にきき、後にはみずから学んで知ったそのところに。

ただ一片の　はかないばかりの

然しそこにしか在り得ない雪の結晶をたなごころにして。

それがいかなる世界であるかを

少年よ　御身^{みみ}らもやがて知るであらう、

たとえば末期^{まっご}のきわなどに……

自殺について

自殺しようと思ったことが、何度かある。まず最初は少年時代、中学三年の三学期のことであったが、星空を仰いでいると宇宙の宏大き無限さ、人間の生命の短きはかなさが同時に感じられて、人生が無意味に思われてならない。そういうことがだいぶんつづいて、ついにある夜、鉄道線路によこたわって列車の通るのを待っていると、やがて列車の近づく音がして、もうちょっと……というところで急にこわくなってはね起き、とびのいた。

バートランド・ラッセル卿も若いころ、しきりに自殺を考えたということが、その「幸福論」(堀秀彦訳・角川文庫)に書いてある。

「……私は幸福には生まれなかった。子供のころ、私の愛唱した讚美歌、それは『この世に倦み疲れ、吾が罪を荷にいて』という歌であった。五つのころ、私は幾度も考えた、もし私が七十歳まで生きるとしたら、私がいままでやっとこらえて来たのは、その十四分の一に過ぎないものではないか、と。そして私は私の未来に永く横たわっている退屈をほとんど堪たえがたいものに感じたのであった。青年期にはいると共に、私は人生を憎んだ。そして絶えず自殺の危険にさらされていた。数学をもっと勉強したいという欲望によって、私は自殺への誘いざないをわずかに抑えていたのであった」

五歳にしてすでに人生に倦怠けんたいを感じたとはおどろくべき早熟で、いかにも天才らしいが、これほど敏感でなくてもすこしまじめに人生を考える者ならば、程度の差こそあれだれでもその生涯に一度や二度は自殺を考えることがあるのではなからうか。

では、人はなぜ自殺を考えるのだろうか。いや、考えるだけでなく実際に自殺して行く者のあるの

は、なぜだろうか。

☆

ラッセル卿は、やがて「自殺への誘い」から解放されて、後年、「今日、私は生活をたのしんでいる。いや、こうも言えるかも知れない。これからさき、年齢を重ねる毎に、私は一層この生活をエンジョイ（楽しむ）するだろう」というような幸福境に到達する。この本を書いたとき彼は五十八歳だったそうで、いまの私より五歳の年長である。だが五十八歳のときこう言えたということは、私と同年ごろはすでに確乎とした幸福境に到達していたことはたしかだろうから、とすれば私はラッセル卿に及ばざること遠しといわねばならない。なんとなれば私は、いまだに時として少年時代に感じたあの「はかなさ」に似た一種の虚無感におそわれることがあり、また生活難から餓死の覚悟をしいられることがしばしばだからである。いや、餓死を覚悟することによって、かろうじて生の不安にたえていることができているのである。思うに、時として虚無感におそわれることと餓死の覚悟とは、おそらく裏腹の關係にあるのであって、かりに生活が安泰であったとしたら虚無感におそわれることもないのではなからうか。

要するに私は無力なのである。だが、無力なればこそ私にはいっそう幸福が必要なのであり、そして無力な者でもある種の方法によれば幸福に到達することも不可能ではない、ということが私の幸福論の基調なのである。

☆

この二十年来、自殺を思わぬ年はほとんどない。毎年一度や二度は思うのである。家族があるからこの際自殺とは必然的に一家心中を意味するのであるが、なぜ私がすぐに一家心中を考えるかという、終戦後、筆一本の詩人の生活にはいる時、妻にこういうことを相談した。つまり、自分のような非才ではおそらく半年とは生活をささえきれまい、されば最悪の状態がきた時は、どうだろう、一家心中してはくれまいか。幸い妻が同意してくれたので、念願の詩人生活にはいることができたわけだが、生活困難に逢着するたびすぐその時の決心が浮かんできて、ともすれば、この辺が死に時じゃないだろうかと思う。いわばクセである。

かりに私が現在とおなじ程度にでも神を知っていたとすれば二十年前、詩人の生活にはいるに際してもおそらく一家心中の決意などはしなかったのではないか。つまり、すべて「神与へ、神とり給ふ」であるから、詩人生活が神のみこころにかなうならば生きて行くであらうし、そうでない場合は自然死という形で死ぬであらうから、あえてみずから生きようとか死のうとか考えるにおよばないからにほかならない。

だが同時に思うのは、一家心中を前提としてまで詩人の生活には行って行ったときの、その一家心中の決意さえあるいは神のはからいではなかったか、ということである。すなわち、すくなくともその時はそういう覚悟でもないかぎり到底その生活にはいり得たはずもなかったし、そして幾たびか

の一家心中直前の危機によって、はじめて私は神というものを知ったのであったから。

地の塩運動のことを考えると、ことにそうである。かりにもし私が、飢えに直面して一家心中を決意したような、そういう最低最悪の荒涼きわまる体験をしたことがなかったとするならば、おそらく私は「地の塩の箱」の構想を思いうかばなかったであろう。すなわち「地の塩の箱」実現の動機のひとつは、そういう恐ろしい思いを他の人々には味わわせたくない、というところにあったからである。私には地の塩運動は神から与えられた仕事だという実感があるが、もしそれがたしかにそうであるならば、神は私にそれを実現させるために、まず詩人になることを強^しい給い、そしてその結果幾たびもの生活難におちいるように仕向け給うた、とまあこういう順序になるのである。

☆

私が「自殺の誘い^{いざな}」から解放されたのは、ごく最近のことである。いや、いまでも「自殺を思う」ことはしばしばであるが「思う」だけで実行に踏みきろうとまではしないのは、ひとえに神に頼^{たの}むようにしているからにほかならない。と同時に、いかに困苦欠乏のときといえども、胸中に、「幸福の春の霜」があつて、それが内側からもろもろの不安・恐怖を消し静めてくれるからである。

ところで春の霜は、たいそうはかない。私の幸福もまだせいぜいその程度だということを、この「幸福の春の霜」という形容は示していて、その点正確な表現だと思ふのだが、その「はかない」程度の幸福でさえ右のごとき作用をするということは、もっと確かな幸福に達した人におけるすばらし

いはたらきを想像させるのではなからうか。それはたとえばソクラテスが、その不当な刑死に際してさえ周囲のひとびとを幸福にさせることができた、あの一事を考えただけでも十分であろう。

☆

人はなぜ自殺をするのだろうか。私は時として自殺を思うだけで実行した経験はないから、もちろん想像にすぎないのだけれども、ごくおおまかに言ってこの世が自分の思うままでないところから、人生がつまらなくなるのが原因ではないだろうか。

こんな自殺未遂者を知っている。まだ若い人なのであるが、小学生時代その受け持ちの女の先生に恋をして、それが青年になるまでつづき、ついに遂げられぬ恋と知って服毒をした。この場合、相手の先生がその恋を受け入れてくれていたらその人にとって「この世は思うまま」であるのだから、自殺をくだてる必要はなかったわけだ。未遂のちその人は数年間「生ける屍しかばね」のようであったが、やがてキリスト信仰にはいたり、詩を作るようになったりして、かろうじて人生にたえているのであるが、その人に会うたび私が思うのは人生というところは恐ろしいところだということである。すなわち、だれが小学校に入学するのにその受け持ちの先生に恋をしようなどと思って入学するだろうか。にもかかわらず恋をしてしまった以上は、どうしようもない。その人がのちに自殺をくだてたことを、私は笑うこともとがめることもできない。いな、むしろ彼の自殺を肯定する。

さきに私は「まじめに人生を考える者ならば……だれでもその生涯に一度や二度は自殺を考えるこ

とがあるのではなからうか」と書いたが、「まじめに人生を考える者」とは言いかえれば理想家ということである。すなわち理想家であればあるほどこの世はその人にとって「思うまま」ではないのだから、生きるというとはいっそうたえがたいものになってくる。私は伯夷・叔斉と屈原のことをよく考える。三人とも理想家中の理想家であつたわけだが、この世に生きるにたえがたく、前二者は首陽山にかくれ、わらびを食つてついに餓死、後者は汨羅^{べいらか}という川に身を投じて死んだ。つまり私が真の理想家であるならば当然この三人のひそみにならうべきだと思うのだが、同時にまた思うのはこの三人の心をもつてあくまで辛抱よく生きて行けば、あるいはすこしは理想に近づくことができるのではないかということである。その思いがからくも私をこの世にとどめているのである。その危うくこの世にとどまっている私を、きわどいところでさきえてくれているのがイエス・キリストで、かりにも私キリストを知らなかったとすれば、おそらく私は早く伯叙兄弟・屈原のあとを追つていたにちがいない気がする。

私がいま最も願っている死にかたは、たとえば初期のキリスト教徒の多くが、捕われて猛獣のえじきとなって死んだ、ああいう死にかた、もしくはそれと本質を同じくするところの死にかたである。

「……ポリカーフは、当時迫害のもとにあつたクリスチャンたちの指導者のひとりでありました。

『どうか身をかくして、私たちを指導して下さい』しかしポリカーフは言いました。『私をライオンにかみ殺させて下さい。私はイエス様のように一粒の麦となつて死にたいのです』彼は神に感謝の

祈りをささげると、ゆうゆうとして飢えた獣のえじきになったといひます」

（羽鳥明「ほんとうの幸福」より）

つまりこれに類する死にかたであつて、これも一種の自殺だと思ふが、同じ自殺にしてもこれならばみずから命を断つわけではないからだ。そういえばソクラテスの死もキリストの死も、本質的には自殺ではなかつたらうか。二人とも逃げれば逃げられる状況にあつたのに、あえてすすんで死を迎へ入れたのであつたから。

さっきの自殺未遂の青年のことに戻るが、彼がかりに幼い時に家庭において、右のポリカールプのような死にかたもあるということを教えられていたとすれば、どうであらうか。同じ失恋して自殺をくわだてるにしても、その仕方がおのずと変わつていたのではないだらうか。

☆

自殺もまた神から与えられた人間の能力のひとつだ、と考えたらいけないだらうか。私は何度も自殺しようとしてしかしついに実行に踏みきることができなかった、その自分の経験からいうのだが、人間の生死というものはある目に見えない大きな者（神）の手ににぎられていて、その者の許しがなにかぎり生きることでも死ぬこともできないのではないか。言いかえれば生きる能力も死ぬる能力も人間には与えられているのだが、その能力はつねに神の管轄下におかれていて、個人の意志によってはどうにもならない。